

武蔵野日曜聖書講筈

我は罪びとを招かんとて来れり

——マタイ伝第9章1〜13節——

1987年9月6日

小池辰雄

汝の罪ゆるされたり 起きて歩め 神みずからのゆえに 魂の世界をキリストに結ぶ 神の愛の力 神の愛の現れんため 愛の極致 一対一の伝道 永遠の生命は愛のあるところ キリストの見えざる手 キリスト一点張り キリストの饗宴 愛の燈火

【マタイ9】

1 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給う。2 視よ、中風にて床に臥しおる者を、人々みもとに連れ来れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』3 視よ、或る学者ら心の中にいう『この人は神を瀆すなり』4 イエスその思いを知りて言い給う『何ゆえ心に悪しき事をおもうか。5 汝の罪ゆるされたりと言うと、起きて歩めと言うと、いずれか易き。6 人の子、地にて罪を赦す権威あることを汝らに知らせん為に』——ここに中風の者に言い給う——『起きよ、床をとりて汝の家にかれ』7 彼おきて、その家にかえる。8 群衆これを見ておそれ、斯る能力を人にあたえ給える神を崇めたり。

9 イエス此処より進みて、マタイという人の収税所に坐しおるを見て『我に従え』と言ひ給えば、立ちて従えり。10 家にて食事の席につき居給うとき、視よ、多くの取税人・罪人ら来りて、イエス及び弟子たちと共に列なる。11 パリサイ人これを見て弟子たちに言う『なに故なんじらの師は、取税人・罪人と共に食するか』12 之を聞いて言いたもう『健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。13 なんじら往きて学べ、「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来れり』

●汝の罪ゆるされたり

マタイ伝の9章1節から8節は、マルコ伝の2章1節から12節、ルカ伝5章17節から26節と、共観福音書で並行の記事になっている。マルコ伝やルカ伝の方が少し詳しいくらいです。ことにルカ伝の方が詳しい。マタイ伝9章1節、



1 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給う。

「己が町」というのはカペナウムのことです。伝道の中心地です。

2 視よ、中風にて床に臥しおる者を、人々みもとに連れ来れり。

マルコ伝では2章1節、

「1 数日の後、またカペナウムに入り給いしに、その家に在すことを聞きて、
2 多くの人あつまり来り、門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語り給う。
3 ここに四人に担われたる中風の者を人々つれ来る。」(マルコ2:1～3)

ルカ伝では5章17節、

「17 或日イエス教をなし給うとき、ガリラヤの村々、ユダヤ及びエルサレムより来りしパリサイ人、教法学者ら、そこに坐しいたり、病を医すべき主の能力イエスと偕にありき。
18 視よ、人々、中風を病める者を、床にのせて担いきたり、之を家に入れて、イエスの前に置かんとすれど、
19 群衆によりて担い入るべき道を得ざれば、屋根にのぼり、瓦を取り除けて床のまま、人々の中にイエスの前に吊り下せり。」(ルカ5:17～19)

これは大変な求め方ですね。入れないものだから、屋根をぶちわってイエスのもとへ吊り下ろしたという。こんなことはちよつと常識的には考えられないですが。

イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう

この句は、マタイ伝もマルコ伝もルカ伝も全部同じです。「彼らの信仰を見て」という。担ってきた人たちの信仰というのは、

「キリストならもう大丈夫、これは治してください」

というキリストの信頼がこの「信仰」です。中風の者はどんな中風だかさっぱり書いてない。ところが、キリストは、

『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』

と。「子よ」というのは親しい言い方です。

「心配するな、汝の罪はゆるされた」

と。これからのように治すか、なんてことは言わない。いきなり、「汝の罪ゆるされたり」と、こう来たです。キリストは、その中風の者の内的な魂の姿が見えている。どういう罪であったか知りませんが、「汝の罪ゆるされたり」と言われた。

3 視よ、或る学者ら心の中にいう『この人は神を瀆すなり』

ということば、聞いているやつが——ルカ伝には

「学者・パリサイ人ら論じ出でて言う」

と書いてある——

「罪ゆるされたりなんて言うのは人間が言つては冒瀆だ」



というわけです。ユダヤ教では神さまの他に罪を赦すものはないという。キリストは神の位置に立つて「罪ゆるされたり」と言った。だから、びつくりして、しかも「非常にけしからん」ということですね。マルコ伝には、

『7』この人なんぞ斯く言うか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦すことを得べき』と論ぜしかば、(マルコ2:7)

と書いてある。ルカ伝にも似たように書いてある。そこはマルコ伝が一番強い。

それで、イエスは彼らが言い合っているのを心に悟って言いたもう。

4 イエスその思いを知りて言い給う『何ゆえ心に悪しき事をおもうか。

あるいは、マルコ伝には、

『イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言い給う『なにゆえ斯ることを心に論ずるか』(マルコ2:8)

ルカ伝では、

『イエス彼らの論ずる事をさとり、答えて言い給う『なにを心のうちに論ずるか』(ルカ5:22)

と書いてある。

●起きて歩め

5 汝の罪ゆるされたりと言うと、起きて歩めと言うと、いずれか易き。6 人の子、

地にて罪を赦す権威あることを汝らに知らせん為に』

まだ「起きて歩め」と言わない前に、キリストはこう言っておられるわけです。こここのところはマルコ伝もルカ伝もマタイ伝も同じです。

「人の子」というのは、ダニエル書やエゼキエル書にも出てきますが、特別な意味をもっている。「メシヤ」の隠語です。ダニエル書は預言書ではなくて、黙示録と同じように黙示文学なので、ヘブライ語の旧約聖書では後の方に、「諸書」という中に出てくる。普通の訳ではみんな預言者の中の一つとして入っているが、これはギリシア語訳の旧約聖書がそうなっているものだから、それによってなっている。ダニエル書というのは紀元前150年頃に書かれた本で一番新しい本です。そこに黙示的に「人の子」という言葉が出てくるわけです。キリストへの一種の黙示的預言です。

「人の子は地にて罪を赦す権威がある」

と。他の人にはできない。それはキリストは罪びとでないから。

そこでいよいよ、どっちがいいかと言って、

——ここに中風の者に言い給う——『起きよ、床をとりて汝の家にかえれ』7 彼おきて、その家にかえる。8 群衆これを見ておそれ、斯る能力を人にあたえ給える神を崇めたり。



マルコ伝には、

「¹²彼おきて直ちに床をとりあげ、人々の眼前^{まのあたり}いで往けば、皆おどろき、かつ神を崇めて言う『われら斯の如きことは断えて見ざりき』」

と書いてある。ルカ伝では、

「²⁶人々みな甚く驚^{いた}きて神をあがめ懼^{おそれ}に満ちて言う『今日われら珍しき事を見たり』」

とある。とにかく、正直、驚きあわてて、参ってしまったわけですよ。まあ、大変なひとです、キリストという方は。

●神みずからのゆえに

病いは必ず罪の結果であると思っではいかんですよ。いろいろな原因がありますから。この中風の者の場合は、そういう原因があった。「罪を赦す」というようなことはイザヤ書に出ていた。これは大事な句ですから、忘れないでください。イザヤ書43章25節、

「われこそ我みずからの故によりてなんじの咎^{とが}をけし汝のつみを心にとめざるなれ」

この句です。神さまは私たちの罪を赦したり心にとめない。「心にとめない」とは忘れてしまうこと。それは

「神みずからのゆえだ」

と言うんです。神さまの、キリストの恵みは、我々を救わんがための恵みだけれども、それは「救わんがため」ではない。「救わんがため」というのは後から出てくるけれども、

「神みずからのため」

なんだ。「ゆえ」であり「ため」である。原因でありまた目的である。原因と目的が一つなんだ。これが

「我は始めにして終りなり」

ということ。

「アルファにしてオメガなり」

ということとはそういうことなんです。神みずからが原因であり、神みずからが目的である。これは誰も変えることができない。干渉することができない。もし、罪の赦しが「我々のため」だったら、大変なことになる。

イザヤ書のこういつた信仰はなかなかつかめない。キリスト教なんて言ったって、大体みんな「救いのため」だと思っている。救済は救済なんだけれども。まあ、その角度を藤井先生はつかんでいた。

そのことと、私がこれから今日の話で言うことが矛盾するようで矛盾しない。非常に大事なことを今日、言いますから。とにかく、聖書というのは大変な本だよ。どんな人間



の深刻な思想も、雄大な思想も聖書にはかなわん。プラトンといえども、カントといえども、大哲学者たちが人ひとりを救ったか。いろいろな暗示は与える。喜びもある程度は与える。けれども、本当に救うことはできない。その「救う」ということも、「救う」ことが目的でないと言うんだから、これは大変なことだ。

「神みずからのゆえに」

ということ。キリストの十字架が本当に「神みずからのゆえに」の十字架なんです。

「人の子の地にて罪を赦す権威あることを汝らに知らせるために」

と。キリストの言葉は権威があると同時に、権威は力をもっている。だから、赦すことと治すことが一つになっている。内外相即しているんです。罪の世界は内的な世界。中風は——中風に限らないけれども——とにかく、病は外的な世界です。罪の世界は、これは心の世界。我執が悪い心だからね。そいつをキリストは赦す。そうすると、同時にもう内側から、根底からは治されている。だから、

「床をとりて歩め」

と。これは自然に出てくる。

●魂の世界をキリストに結ぶ

私も祈る角度はそれなんです。その人の病気が罪の結果だなんて、そんなことは思いませんよ。とにかく、内側の魂の世界をキリストに結ぶ。そうすると、魂の世界に力がくる。それから、キリストはその時に即刻癒してくださいさるか、あるいはもう少したってから癒しになるかは、それはキリストの側だ、神さまの側だ。根源の現実ではその人は癒されている、という結果を既にそこでもってこつちが受けとってしまう。たとえ癒されなくても、目が見えなくても、目はあいてしまっている。耳は聞こえなくても、耳は聞こえている。イザヤ書35章のあの預言を、その現実を、祈りの世界で相手に先取りしてしまうんです。

「どうも、祈ったけれども、そんなことにならなかった」

なんて、そんなことをクヨクヨ思わない。ならなかったっていいよ。その角度でいくと、パッとその時に治る場合がむしろ、かなり私の経験ではあるけれども。そうでない場合もありますよ、もちろん。とにかく、祈りはいつも心の世界です。肉体の癒しの祈りであっても、何でも。

「按手」にしても、そうなんです。局部のために按手しているのではないんだ。それを疑っていたり、反抗したりしていた人は、心の世界で躓いているから、これは通じない。問題は受けとる方の側にある。

「なかなか、治らないけれども。ダメだ、あの按手は」

なんて、そう思われては困る。そうじゃないんだ。



キリストはもう「即」の世界で全部やってしまう。

「癒されたり!」

なんて、最初から完了形で仰つたりする。

「立て!」

だなんて。立てるか立てないか、普通の人には分からない。ところが、「立て」と言ったら、跛者が立ち上がってしまう。「起きよ!」と言えば、死人が甦えつてしまう。これは権威があるからです。力を持っている。とにかく、そういうことで、中風の者が直ちにいやされてしまう。

「起きよ、床をとりて汝の家にかえれ」

だつてき。大変なもんだね。床のまま屋根から吊り下ろしたという、そういった病人が癒された。

● 神の愛の力

9 イエス此処より進みて、マタイという人の収税所に坐しおるを見て『我に従え』と言ひ給えば、立ちて従えり。

「マタイ」というのは「神の賜物」という意味です。

10 家にて食事の席につき居給うとき、視よ、多くの取税人・罪人ら来りて、イエス及び弟子たちと共に列なる。

特にこの「罪人」という言い方は、モーセの十誡の、「父母を敬え」の次の、

「殺すなかれ。姦淫するなかれ。盗むなかれ」

この三つを破っているような人を特に「罪人」と言う。パウロが言っているような「罪び」という意味ではないですよ。ユダヤ教の十誡の後半の方を犯しているのを「罪人」という。

11 パリサイ人これを見て弟子たちに言う『なに故なんじらの師は、取税人・

罪人らと共に食するか』¹²之を聞きて言いたもう『健やかなる者は医者を要

せず、ただ病める者これを要す。¹³なんじら往きて学べ『われ憐憫を好みて、

犠牲を好まず』とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人

を招かんとて来れり』

「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」

とは、ホセア書6章6節にこのことが書いてある。預言者は、いわゆる宗教的な犠牲みたいな——これはアブラハムから始まっていて、羔羊をほふつてどうのこうのという犠牲の宗教だから——そういういわゆる宗教的行為ではないと言っている。

この「憐憫」という字は、ギリシア語もヘブライ語も多分そうですけれども、あの

「幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん」(マタイ5:7)

の「憐憫」と同じ字です。「愛」という字とはちよつと違う。しかし、内容的には同じと言



つてもいい。憫みの心、思い遣りの心。仏教でいえば慈悲だね。慈悲心、愛、仁みな同じだ。その「権威ある力」というのは、内面は愛です。そうでなかったら、サタンも力を持つているよ。呪いの力をもっている。これは愛じゃない。霊的な力があるからね、いろいろな他の霊にも。けれども、この愛の力、憫みの力、これはこの神・キリスト・聖霊の世界です。いわゆる霊的な力が働いたって、それが本当の愛でなかったら、それはダメなんだ。「ワツシヨイ、ワツシヨイ」と祈ってみたり、妙に密教的な祈りをして、そして、作用したって、それはいわゆるデーモンニツシュ、鬼神的である。

「そういつた空中にいるところのデーモツニツシュな霊と戦え」

とパウロが言っているのは、そのことなんだ。悪霊と戦えと。キツネやお稲荷さんや、いろいろあるわ。いいですか、この「権威」は神の愛の力なんです。この神の愛の力にはかなわないんだ、実はどんなものも。

●神の愛の現れんため

さっきのイザヤ書の言葉は、

「神の愛の現れんためなり」

なんだ。

「われこそ我みずからの故によりてなんじの咎とがをけし汝のつみを心にとめな

ら

というの、

「自身自身の本質が現れるため」

だということ。それは、愛という本質が現れる。それが「みずからの故に」ということです。結果としては、相手は救われる。

「神は愛なり」

というのは本質なんだ。属性ではない。これは本質だ。よく「属性」なんて書いてあるよ。そうじゃない。神即愛なんだ。その本質が現れんがため。それが原因で目的なんだ。神の本質が原因であり、神の本質が目的だ。それに付随して結果してくるのが、この「救済」、我々が救われるということ。だから、聖名が讃えられるんです。我々が救われるためだったら救われたらめでたしめでたしだが、救われないと逆に今度は、ちつとも救ってくれないではないかという抗議がくる。それは自分を立てているから。自分を立てているような救いはダメなんだ。これは御利益ごりやくという。

私は高次な世界をいきなり言うから、ちょっと戸惑うかもしれないけれども、まあ、じっくり心に留めておいてください。イザヤ書がちゃんと言っている。その神に立ち帰ること「悔改め」ということです。「回帰せよ」ということ。ニーチェが「永劫回帰」なんて言うけれども、



「回帰また回帰せよ」ということです。

だから、罪びとを——我々は全部、罪びとなんだ——キリストは

「私は罪びとを招かんとして来た。正しき者は要らない」

「お前たちは、パリサイ人や学者は正しいと思っているが、本当は冗談じゃないよ」というわけだ、そこまでは仰らないけれども。

「善人が救われる。いわんや悪人をや」

という、親鸞の言葉もあるとおりです。相対的な善だの悪だのと、そんなところではない。相対的な善悪の判断の世界ではない。相対的な話をしていたら、いつまでたっても始まらないですよ。どんな偉そうなひと、立派そうな聖人君子も、神さまの前にはダメなんだ。人間を感じたつてダメだ。素晴らしいのはキリストだけです。

そのキリストはちつとも素晴らしくない。無者なんだ。

「自分は何ものでもない。素晴らしいものは世の中にない。神さまだけが素晴らしくい

と。その素晴らしい神さまを100%に受けとつたキリストが、神さまの素晴らしさを現した。

「なぜ、私のことを善いと言うか」

とキリストは言っているじゃないですか。

「私は何もできない。何も言えない」

と。ところが、神さまの素晴らしさを100%受けとつたから、

「我を見し者は父を見しなり」

と仰つた。これはみな神の栄光の現れんがためであつて、キリストを素晴らしくせんがためではない。神の栄光が現れたら、結果としてキリストが素晴らしくなっただけの話です。我々もキリストの中に——そのようにして十字架で神さまの本願が現れ、復活で本願が現れ、聖霊で神さまの本願が現れたら——その中に入れられたら救われました、ということなんです。我々を救わんがためではない。神さまが自らの本質を現したからです。太陽が光つたら、花が咲いたりする。太陽は花を咲かそうとして光っているのではない。太陽が光つたら、花が咲いたということ。だから、これは太陽の栄光を現している。太陽の栄光が現れている。そういうのが神の愛、キリストの愛なんです。

「栄華を極めたソロモンの素晴らしさもこの花の一つにかなわない」

という。

●愛の極致

「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」

とある。ところが、キリスト自身が犠牲となつた。それは宗教的儀式ではない。十字架と



いうものに架かって犠牲になった。それ自身が憫みの極致なんだ。愛の極致です。これは神さまの贖罪の愛だから。神の愛が贖罪という面で現れた。神さまの愛はいろいろな現れ方をするからね。贖罪という現れ方は一番おそろしい根底の現れ方だ。そして今度は、復活という生命を与える。聖霊を与える。全部これは愛です。愛は最大の力をもっている。

「いかなる愛でもみんな神から来ている」と言つたでしょ。キリストは愛の権化なんだ。けれども、それは同時に義であるわけです。義であるということは、神の御意を受けとつていているということ。だから、縦の関係（義）と横の関係（愛）がクロスしているんです。

「エホバ、イスラエルの王、イスラエルを아가なうもの、万軍のエホバ如此いたもう。われは始まり、われは終わり。われの外に神あることなし。」（イザヤ44・6）

とある。イザヤ書というのは本当に凄いな。

キリストは、

「私は罪びとを招かんとして来たので、自分をいいと思つたり立派と思つたり、そんなのは私の世界ではないぞ」

と仰る。キリストが相手にしてらっしゃるのは、取税人や遊女や、病人や目が見えない方、いろいろな身体障害者、癩病人、そういうのをキリストは相手にしている。それをみんな天国に入れてしまう。キリストは、

「神さまを要らない者は、それは私とは関係ないよ」

と言うんだ。だから、

「健やかなる者」

というのは、逆に言うつと、

「己を義とする者」

ということだ。

「己を義とする者は私とは関係ない。哲学や道德などでいく者はそれでいきなさい、関係ないから。どうにもなりませんと言うひとはやって来なさい。私はそういう者を招かんとしてやって来たんだ」

と。「罪」ということをあまり言い過ぎて妙に非常に暗いことになってみたり、「そんなことはもう言う必要はない」と言つて「罪」ということを省いてしまつたり、どっちもダメだ。本当の意味で「罪」の自覚がないとダメです。「罪」とは自我だよ、要するに。「罪」という言葉は躓きになるかもしれないけれども、我、我執なんだ。だから、

「無我の世界、無私の世界に入れてやるよ。お前のその我は取り去つた」

と言う。始めからキリストは無者だから、私たちはキリストの無者なんです。キリストによつて無にされた者、贖われたる罪びとということですよ。



何も他人を羨む必要はない。偉そうな人がいたら、逆に可哀相だと思いなさい。あれは神さまを見損なっている、神さまと接触しそこなっている気の毒な人だと。人間の救いが目的ではない。

「では、こういう場合には救われるでしょうか、救われないでしょうか。選ばれているでしょうか」
なんて、そんなことを思う必要はない。

● 一対一の伝道

私はあなた方に、

「一対一の伝道をしなさい」

と言っている。来年は特別集会へ、みんな一人が一人を連れてきたら、あの旅館の会場には入れなくなる。結構だよ。そんなことを心配しないで、大いに一人が一人を連れて来てください。今度は参加申込み順にしましょうと。ボヤボヤしていると、入れなくなる。

私は野尻に行く途中の電車の中でお隣の席の人に、これもご婦人だったけれども、ちょっと話しかけた。そしたら、向こうは私のことを学者と思つたらしいね。

「どちらかの先生でいらつしゃいますか」

「私はもう実は先生ではないんだ。キリスト教の伝道をしているんですよ」と言つたら、びっくりしていた。

「そうですか、実は私の父も無教会です」

と、無教会の話になつてしまった。

「私も無教会にいたんだけど、出てしまった」

と。これは軽井沢で下りる人だったんだよね、高崎を出てから話しかかった。それまでは向こうも本を読んでいたし、こっちも本を読んでいたから。

「それでは、もつと早くからお話し合いをすればよかった」

なんて向こうで言いだした。

「もし、あなたが私のものを本当に読みたいと思うなら、申し込んでください。いくらでも上げますから」

と言つて私は名刺を渡した。その時残念ながら、「エン・クリスト」を持っていなかったから悪かったです。まだ何も言つて来ないけれどもね。とにかく、そういうことで、

「使徒的な次元でなければダメだ。だから、私は無教会から出てしまった」ということをはっきり、忌憚なくしゃべった。驚いていたよ。

「今日は大変、大事なことを承りました」

なんて言っていたけれども。果が実ろうが実るまいが、言うべきことは自然に言わされてしまう。



●永遠の生命は愛のあるところ

己を義とする者を「パリサイ」という。

「そういう者は私には関係ない」

とキリストは言われる。これがキリストから言われているところの

「偽善なる学者、パリサイ人」

ということだ。

芸術であろうと、学問であろうと、事業であろうと、何でも、そこを絶する世界に入らないと、本当にそれが展開しない。これはもう、この世界に入らなければ分からないね。いい加減な信仰でも分からない。超一流の芸術家はみなその世界に入っている。ダンテでもゲーテでもベートーヴェンでも、ああいうことになっている。マラーなんていうのもそうでしょう。なにも世に聞こえる必要はない。我々自身が、皆さん一人びとりが超一流になれるんですよ。超一流はキリストだもの。人が認めようが認めまいが、キリストを受けとったら超一流になるんだから仕方がない。それが、

「キリストを受けとった罪びと」

というのがそういうことです。根源の現実の中に入ってしまいうから。天国はもう既に来ているから。

現象しようがしまいが、人それぞれだから、そんなことはどれだつていいんだよ。けれども、

「できれば、そういう賜物たまものが来るといいねえ」

とパウロはコリント前書12章、14章で言っている。けれども、大事なのは13章だ。愛のことです。第13章は愛の讃歌です。パウロがあれだけの患難を力をもって突破できたのはキリストの愛が実力となっていたからです。いわゆる生も、いわゆる死も、もう超越してしまふ。そんなものを超えてしまっている。永遠の生命は愛のあるところにある。愛のないところには永遠の生命はない。こういうわけですよ。

●キリストの見える手

身体の具合が悪かろうが、それはどうだつていいよ。キリストの愛を本当に受けとつたら、これはもう必ず勝ちます。この世のいろいろな健康法とか、薬だとか、お医者さんだとか、それはただ補助に過ぎない。一番大事なのはキリストの愛そのものを受けとることです。これが中心でなかったら、いわゆる健康法ではダメなんです、いくらたつても。本当の平安と力はこない。

その人は病んでいて病んでいないんですよ。ところが、片一方は健やかでいて実は病んでいる。本当の病人は、神さまからは分かるんです、本当の病人はどっちだか。

「病氣」とはよく言ったものだね、気が病んでいるんだ、みんな。病氣というのは、霊、心、気、魂、それが病んでいる。そうすると、いわゆる肉体の病氣にもなる。しかし、それが病ん



でいなくても、実際に肉体の病気が来ることは、いろいろな原因でありますよ。けれども、気の世界が本ものなら、必ず勝ちますから。大丈夫です。キリストは不思議なことをなさいますから。

キリストですよ、不思議なことをするのは。その補助として私みたいなやつが按手したりするけれども。ご自分で按手なさって一向差し支えない。キリストの手が、見えざる手がちゃんと来ているから。キリストの見えざる手を受けとらなければダメです。補助手段は、それぞれお考えになつて結構ですが。私は「なにも要らない」なんて言っているのではない。「中心がはつきりしていなかったらダメだ」

と言っている。何がなくても、キリストだけははつきりなければダメだ。キリストがなくて、他のものがどんなにそろつても、それは結局、相対的なことでダメだ。

●キリスト一点張り

神自らのゆえにキリストは現れた。その恵みがこぼれて、我々は救われている。こういうわけです。目的は神自身です。だから、私たちは神の聖名を讃える。我々のためだったら、これは御利益になる。

「救われました。めでたしめでたし」と、それは御利益信仰という。

「神の栄光の中へ連れて行こう」

というのが福音というものです。喜びの音信という。「喜び喜べ」という。神自らの故に信ずる。これは親鸞の信仰もそうでしょう。

「たとえ地獄に落ちても」

と言っている。

「たとえ殺されても」

とヨブも言っているでしょう。これは神の故に信じているから。その信仰が一番凄いです。

「一日の労苦は一日にて足れり」

とある。信頼の世界だね。藤井先生はそういう魂でした。先生が死んだときは、貯金もなければ借金もない。何といても、私の恩師は藤井武です。なかなか厳しい方だったけれどもね。藤井先生を無条件に誉めたら、それはダメです。先生ももちろん、人間ですから。

「私を誉めたら蹴飛ばすぞ」

なんて言っていたもの。それはもう十字架です。

キリストは我々罪びとを招かんために、やつて来られた。

「偽善なる学者・パリサイ人は関係ない。天国はそういう人の行く所ではないんだ」と。ありがたいじゃないですか。

「神さまの栄光を喜ばないやつらは要らない」



ということですが。芸術的作品であろうと、これは神の栄光の現れとしてある。「宗教的な内容でなければ芸術でない」なんて思うのも間違いです。

「自ずから神の栄光が現れている」
という姿。色が全然なくて、しかも、驚くべき色彩をもっている。そういうものなんですよ。だから、

「恵福なるかな、霊が貧しい者——わが十字架によりて霊が貧しくされた者——天

国は——聖霊の我は——なんじにある」
と。これが何といつても基礎なんです。これがグーッと展開する。

「赦す」という言葉はなにか消極的だけれども、「愛する」という内容です。小さなことはもう問題にしないで、太い線で行きましょう。キリスト、一点張り。そうしたら、すべてが自然にとけていくから。無の中心の一如、それから無限無量なものが展開する。虹の露が無色であつて、七色になると同じこと。そういうことを歌ったシラーの「芸術家」という素晴らしい詩がある。なかなか難しい詩ですけれども。

●キリストの饗宴

キリストは、

「正しき者を招かんとにあらず」

「お前たちは正しいなんて思っているが、冗談じゃないぞ」

と。「罪人を招かんとして」は本当は

「万人を招かんとして」

なんだ。すべての人は罪びとではないですか。パウロが

「義人なし一人だになし」

と言っているとおりで。

「万人を招かんとして来たのに、なぜ私を要らないと言うか。私を要らないと言う

やつは、それは自分を義ただしいとしているからだ」

と、こういうことなんです。日本には、

「キリストは要りませんよ」

という人がたくさんいるよな。

「ああ、キリスト教か。そいつは要らない」

なんて。教えは要らないよ、キリストは要るよ。「求めよ」というのはキリスト教を求めるのではない。キリストを求めるんだ。「教」ではない。教えだと思ふからいかん。「キリスト教」なんて言うから躓くん。キリスト教という名前自身がもう躓きになっている。

「キリスト教はどんなことを言っているか？」

なんて、「言っているか」ではない。



「来たりて視よ」

というのは、

「キリストを視ろ」

ということです。

「福音書を読め。これはドラマだ。そして、降参しなければ、キリストに本当に出会ったことにならないぞ」

と簡単なんだ、私の答えは。それ式ですからね、私の著作集第十卷（『聖書は大ドラマである』）で書いているのは。七面倒臭いことは書いてない。だから、

「罪びとを招かんとて来れり」

というわけだ。我々は招かれて、キリストの饗宴にあずかる。福音書自身ももう饗宴の世界ですから。

● 愛の燈火

それで、キリストの直弟子のパウロ、ペテロ、ヨハネ、それらが使徒行伝でキリストの栄光を現しているでしょ。あの栄光の現れているのが救われている証拠なんだ。だから、救われた人は栄光を現さざるを得ない。また、それぞれを通して、栄光が現れざるを得ないと、こういうわけだ。

「それではどんなことが栄光ですか」

なんて、そんなことをまたゴタゴタ考える必要はないですよ。存在それ自身が栄光ですから。愛の魂それ自身が。キリストの愛の燈火ともしびを灯していなかったら、それはダメだよ、いくらなんでも。自分で灯すのではない。受けとるだけの話だ。こっちは無条件の世界だから。資格はひとつも要らない。無資格だ。こないだも最後に言ったでしょ。天国に入る資格と同じだよ。キリストは山羊と羊とを分けて、

「喉が渴いた時にその人に水をやったか。それは私にくれたんだ。そういうのは天国に入るが、人が喉が渴いているのに水もやらないのは、これはちよつと待てと
いうことになるぞ」

と。あれはあれで大事な真理です。けれども、そういうった行いをしていなかったならば、というようなことを条件にするのではない。十字架の盜賊も、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。何もいいことはしてないんだ、彼は。真先に入ってしまった。

だから、キリストの言葉というものは、分析して考えたらダメです。いろいろの場合に、それぞれのときに、そのときにのつぴきならぬことを仰る。けれども、いわゆる組織的神学にはならない。だから、組織神学は、私は反対です。ドラマティックなんです。全然矛盾していることがある。



「神が分かったら、本当はそんな神は神ではない」とエックハルトも言っている通りです。ただ無条件に

「アーメン、ハレルヤ」

と言って受けとる。人間的には愛と思えないようなキリストの行為も、その中には深い愛がある。

「汝は愛なり」

と。私たちは運命環境において一切を、

「キリストは愛なり」

ということを書いて——観念ではないよ、お題目じゃない——それを本当に受けとることのできるのは聖霊の世界なんです。聖霊が来ていると、それが受けとれる。だから、私は、

「いろんなことのでつくわせば逆に力が来ます。行き詰まりませんよ」

と言うのはそのことなんです。聖霊の愛は一番の力をもっているから。キリストの愛、神の愛と言ったついでいい。同じことだ。具体的には御霊として我々の中に来たりたもうところのこの愛です。内住していなければしょうがないんだから。

「われキリストのうちに。キリストわがうちに」

という世界は、これは聖霊の世界だから。

「エン・クリスト」

です。これもお題目ではダメですよ、皆さん。『エン・クリスト』(EN XPISTO)という雑誌の表紙を見て、じーつと瞑想してその中に入らなかつたら。

「あ、これはエン・クリストという字か」

なんて。字じゃないよ、暗号だから。暗号です。

「過ぎ行くものは本体の影像である」

とは、ゲートの有名な言葉だ。このコスモスもそのうちには枯れる。しかし、この今きれいに咲いているコスモスや、菊の花や、そういう花はしばまざるところの永遠の太陽の光の栄光の現れである。瞬間において永遠をつかまなければダメなんです。そういう人はもう生死を超越している世界です。それは瞬間において神の光、神の愛、キリストの光、キリストの愛を受けとる。福音書は結局、それです。

「汝らは世の光なり」

「私を受けとれば光だ。私を受けとれば塩だ」

と。海の塩水みたいなもの。パレスチナにはものすごく塩があるからね。死海が大体、塩でもってあんななんだ。だから、

「汝らは地の塩になれ」

なんて言われた。

